かんなな

逢坂　てんま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かんなな

【Ｎコード】
Ｎ７６０９Ｗ

【作者名】
逢坂　てんま

【あらすじ】
それがあれば生きていける八つ橋大好きっ娘と、それに振り回されている男子約一名の、
どこにでもありそうで、そんなの絶対にないかもしれない、とある学園の物語。
そんな彼らに、ときたま飛び込んでくる「相談ゴト」。
難解な事件を見事に解決（？）できるのか、できないのか、
乞うご期待。

「信長と秀吉」なんて呼ばないで

これがはじめてのお遣いではない。
「やぁやぁ、八つ橋クン。ごくろーごくろぉー」
しわくちゃのスーパーのビニール袋をヘロヘロになりながら、その小娘に手渡す。
ビニール袋からサッと取り出し、八つ橋の紙袋をバリバリ開けると、そのひとつをひょいっと口に銜(くわ)えた。
「んはぁ、ああぁ、ああぁ、ああぁぁ……か・い・か・ん……」
八つ橋を銜えたまんま、両手を頬(ほほ)に当ててにんまり。
で、どこかで聞いたような科白(せりふ)。
「あのなぁ……ってか、俺は『八つ橋くん』じゃねぇしっ！」
「まぁまぁ。よいではないか、よいではないか」
銜えた八つ橋をまだ口で、にゃむにゃむしながら、俺の頭をぽむぽむっ、と軽く払った。
何だか言い訳しているみたいで厭(いや)だが、決して俺は、『パシリ』などではない。
決して。
「毎回毎回、俺に買って来させるな！たまには自分で買って来やがれ、この短髪メガネ！」
「そんな、第一、買って来てもらうからこそ、おいしいんじゃーん！」
そう言ってぱくぱく放り込んでいく。
その顔は、露骨に無愛想な表情で机に肘をついている俺とは対照的に、本当に幸せそうだ。
「はあぁ……」
と、わかっていて溜息をついているこの俺は、なんなのだろうか。
人は何処からやってきて、何処へ向かうのか。人とは何か？
八つ橋女が、「さてと」と言いながら、パンパンと手を払い、組

んでいたスラっとした針金のような細い脚を外しながら、座っていた机からぴょんと跳び下りると、「１０点ぇーん！」と大きく万歳をした。
振り向きざまに、
「あ。今、パンツ見たでしょ？」
ダンっ！と、俺は勢いよく机を両手で叩きつける。
「見えとらん！！たとえ見えたとしても、見らんわい！」
「……そこまで言わなくてもいいでしょ？別に減るモノでもないんだし……」
「いや、あの。何だかそれは違うと思う」
ふーん、と言わんばかりに急に澄ました顔つきになったかと思うと、ぱっぱっとスカートの皺（しわ）を手でのばすと、足早に部屋の出口へと彼女は向かう。
まぁ、これもいつものお約束で、どこに行くのか、何しにいくのか、わかってるんだがまぁ、一応。
「しょーこりもなく、今日もですか？」
嫌味たっぷりに俺がそう言うと、彼女は待ってましたと言わんばかりに、クルッと扉を開けながらこっちに振り返り、どや顔で
「そ。だって、それが私達の仕事でしょ？」
と、言い残すと、扉は何も言わないかのように、静かに閉まる。
俺は毎回この時に八つ橋を買いに行って歩いた、というのとは別に、何とも言えない疲労感に襲われるのだ。

暫（しばら）くして、全館放送のチャイムが館内に響く。
俺も含めて全校の生徒が、部活に汗を流し、時には心置きなく青春を過ごす放課後を、土足で踏みにじるように上がりこんで来る。
その声の主は、意気揚々と部屋を出て行った、あの「八つ橋女」だ。
「……えっ？もう入ってんの？……ん、んっ！あ、あぁ……、えー」
早く言えよ。

「全校生徒の皆さん。こちらは、生徒会です。皆さんがより良い学校生活を過ごせるように、生徒会ではどんな相談でも受け付けております。何でも、ずばぁーっと解決致しますっ！」
ボリュームが最大になっているのか、時々音声がハウリングする。
放送室で力説している姿が、よーく目に浮かぶ。
「あ、それから、えっと。ビバ！放課後ライフっ！！」
……放送終了のチャイムが毎度のこと空しく、無駄に大きな音で全館に響いている。

「どうだった？あたしの麗しい声は虹の彼方まで届いたかしら……」
部屋に戻ってくるなり窓の外の夕陽を眺めつつ、洋画劇場のようなワンシーンを演じている。
「毎回毎回、よく飽きんな」
「ったく、何言ってんの？だってそれが生徒会の一番のツトメでしょ？」
「だぁーれも、なぁーんにも相談に来ねぇじゃねーか。それに、こんな事やってるから定例会議の時でも『だいたい、生徒会は仕事してるんですか』って、毎回キッツい意見が飛び交うんだよっ！」
「そんなこと言ったって、相談自体が来ないんじゃ、しょうがないじゃない！好きな八つ橋を食べるしかないじゃん。」
俺は無言で部屋の隅っこで「ここにいるよ」と、叫んでいる所謂、仕事の山をサッと指差す。
「……あれは、なーんだ？俺も片付けたいけど、誰かさんが手伝ってくれなかったり、毎回毎回毎回毎回誰かさんのお菓子のお遣いのせいで、増えてく一方なんだよっ！」
「それは生徒会の仕事でしょ？で、誰かさんて、誰？」
「お前もそうだろうがっ！それと、お前だよ！！」
「あたしは相談役に徹するのっ！えっへん」
何ですか、その態度。無茶苦茶腹が立つんですが、それは俺だけでしょうか？

「とにかく、ちょっとでもあの山を減らしていかないとだな……」
「はいはい、やればいいんでしょー、ああー、コワイコワイ」
――――教えてください。
紳士というのはこういう場合でも、気持ちをそっと胸にしまっておけるのでしょうか？
そう考えていると、彼女が「ほんじゃ、整理しましょうかねー」と、無手勝流（むてかつりゅう）に山のファイルをバッサバッサと放り投げているので、そろそろ本気でシバき回そうかと、腕まくりをした時、扉がカチャと開いてどうにも不安そうに人が入って来る。
「あら？どうしたんですか？」
床にしゃがみ込んで「何か用？忙しいんですけど」と、言わんばかりに首だけを後ろに向けて、彼女は言う。
「なんだ、数学の吉井（よしい）先生じゃあないですか。間違えて入って来ちゃったんですか？」
俺も多分その時、あからさまに怪訝（けげん）な顔をしていたに違いない。
わかる？
それほど、ここに人が来るなんてことないんだよ！
「いや、違う違う、相談だよ。相談に乗って欲しくて来たんだよ」
え？マジで？
「いやー、あの……すいません、今いそがし――――」
しかしこの時、これでもかと、両目を闇夜に灯（とも）る街灯のハロゲンランプより輝かせたのが約一名。
「ぜ、是非その相談に乗らせていただきますっ！！」
どんな内容なのか全くわからないにもかかわらず、俺の返事に食い気味にかぶせてきて、頭が床に着くんじゃねぇかというぐらいに深々とお辞儀をする「バカ女」がいる。
「このファイルはいつ片付けんだよ！？」
「んなの、後でいいでしょ、後で！……ところで、さっきあたしがお辞儀した時に、どさくさに紛れてパンツ見たでしょ？そうでしょ？」

「馬鹿野郎、見てねーよっ！あのなぁ……そうやってな、仕事をここまでほっかたらかしにしておいたのは、どこのどいつだよっ！」
「はいはい、そんなのしーらなーいっと。やつはしたーべよっと……いいっ、いひゃい、いひゃいよー、にゃにすんにょー！」
「そんな口叩いてるのは、この口か、この口なのかっ！いい加減にしろ、この妖怪八つ橋女がっ！！」
俺たち二人の喧嘩（けんか）を鎮火（ちんか）できるような消火器を持っていない先生は、ただ「お、おい……き、君たち……」とオロオロするばかり。
「と、とりあえず君たちに見てもらいたいものがあるんだよ。えーと、あ、これなんだけどね……」
先生は慌てて、ジャケットの胸ポケットから何かを取り出す。
それは長年使い込まれた表紙の革が、いい感じに色褪せている手帳で、あるページに紐の栞（しおり）が挟まっている。
栞のページを開くと、そこはカレンダーになっていて、スケジュールがところどころ書き込まれている。
ほっぺたを俺にぎゅっと引っ張られていた彼女も、それに気付く。
「……『33』ですか？」
ちょうど今日の日付に丸がしてあり、その欄に33と書いてある。
「そう。で、この33が何の事だかさっぱりわからんから困ってるんだ……」
え？
「いやいやいやいや、先生が書いたんでしょ、これ」
「そうなんだけど、うーん……なんだっけなぁー……何か大事な事だったような気がするし……会議の予定でもないし、あぁー……」
――――いるんだよなー、こういう人。
でも、こればっかりはさすがに協力しようにも、どうにもならない……
「まぁ、あれだ。時間もない中で協力してもらうわけだし、お礼は何なりとするつもりだよ」
「じゃ、じゃ、はい！あたし、八つ橋一年分！」

はぁ……と、何度ついたかわからない溜息をしながら俺は重い腰を上げる。
「まあ、わかりました、先生。折角ここに来てもらった訳だし、協力させてもらいますよ。」
「そうかい！いやぁ、助かるよ。やっぱりこういう暗号みたいなのは、若い君らのような力が必要だと思ってね。はははは……」
暗号って、先生。
余裕のない乾いた笑いが、部屋中にこだまする。
そして、自分で放った寒い空気を打ち消すように、咳払いをひとつ小さくする。
「……さて。じゃあまず、どう思う、生徒会長くん」
と、先生は彼女に目を合わせる。
何故かどや顔の彼女。
「せんせぇー、あっしは『副』会長ですぜぃ。確かに会長の器であるのは、あたしですがねー、うりうりー」
何のアピールなのか。
人の上げ足を取ったのがそんなに嬉しいのか、肘で先生をこれでもかと突いている。
先生も先生で、顔を赤くしながら「いやー、すまんすまん」と頭に手をやっている。
何だこれは。漫画か？
まあ、なんだ。彼女が毎日毎日全館放送で相談しに来いだの、突拍子も無いことをいきなり人前でやったりだの、キャラが強烈だから「こっちが生徒会長」と勝手に思われているのが現状である。
彼女が会長の器なのか、茶碗なのかは知らん。
「改めて。俺が生徒会長の神崎（かんざき）。そんで、こいつが副会長の七尾（ななお）だ」
「そんでもって、改めて。ようこそ！生徒会室へ！」

「信長と秀吉」なんて呼ばないで（後書き）

みなさん、初めまして。
初めてではない方は、こんにちは。逢坂てんまです。

この度、「かんなな・『信長と秀吉』なんて呼ばないで」を最後まで読んでいただき、
感謝感激、雨アラレです。

二人の主人公・神崎くんと七尾ちゃんは、特に七尾ちゃんですが、
書いていくうちに段々どえらいキャラに育っていきました。
それに伴い、神崎くんのツッコミが増していき……
気が付くと、こんな感じに。
てへっ。

まあ正直、
これから、もっともっと変なキャラにしていきたいと思っておる所存です。

この「かんなな」はネタが続く限り、私の脳がオーバーヒートしない限りは続けていきたいと思っておりますので、
みなさんのあたたかい励ましのほど、何卒よろしくお願いいたします。

この小説の半分は「みなさんの優しさ」でできています。

それではまた、次作でお会いしましょう。
ペコリ。

人生には少しの夢とハリセンを

春は「出会いと同時に、別れの季節」と、よく言われる。
それは、学校生活においてもそうだ。

俺も高校生活が慣れてきて、なんとなく日常の生活に何か活性化というか、自分に何かできる事でそれでいて、毎日が新鮮で少しでも刺激的なものであればいいな、と思っていた。
別に俺は勉強ができて、スポーツも万能。という柄ではないが、最高学年になったら、誰しもがちょっとは意識する「生徒会長」というものに興味が惹(ひ)かれた。
生徒会長とは、そういう人がなるべきものだと感覚的に思っていたからだ。
でも、自分で立候補して、「こんなことをしたい、こういうところを見直すべきだ」とか、様々な持論をみんなに力説し、最後の最後まで諦めずに走り回って。
――――――そして、ついに当選した。

ただ、当然ではあるが、俺の相方である「副会長」もまた選挙で選ばれる。
自分が勝手に「この人がいいです」と、指差して決める訳ではない。
その人物も俺と同様に、熱い思いを抱いて、見事当選を果たした。
俺も実際にその素晴らしい演説を聞いて、これほどまでに聴衆を魅了し、説得力があり、こんな真っ直ぐな目をした人がいるのかと、つくづく感じた。
世間は広い。
俺は、まだまだ「井の中の蛙(かわず)」だったと、思い知った瞬間だった
――――――

その時は……その時までは……。

俺にとっての「春」は、念願の生徒会長になれたというその喜びとの出会いよりも、普段の何気ない生活からの逸脱（わかれ）の方がずっと凄惨だ。

目に見えないものもど、無くしたときにその存在や価値の大きさに初めて気付く、とは本当によく言ったものだよな……

俺の高校生活、そして何よりも生徒会長としての充実したスクールタイフを、その犯人は容赦なくバラ撒きまくっている。

でも、そいつは悪気が無いとか、故意でなっていないから、とかではなく、ただ単に強烈な「ジコチュウ」なだけだ。あいつの場合は。

彼女のモットーはいつも一貫して変わらない。

「学校全体のことは、生徒会が引き受ける」と。別に何も変な主張ではない。

ただ、そのやり方は一風どころか、十風も万風も変わっている。

「相談ゴトがあれば生徒会室まで来なさい！」と毎日、全館放送を使って宣伝文句のように繰り返す。

しかし、そのクセ、本来の生徒会に関わる仕事や雑務は一切しない。俺に丸投げもいいトコだ。

さらには自分の好物で、それが無いと死んでしまうのかわからんが、俺の通学路の途中に売っている、という理由で八つ橋を俺に買って来させるのだ。

そのせいで、売店のおばちゃんには「毎度どうもね。おまけしておくよ」とか言われたり、友人には「よっ、今日も嫁のお遣いですか？だ・ん・なっ！」とか、ちょっかいを出される始末……

俺はこんなことをするために、生徒会長になったわけじゃあないっ！

……と、思っているのだけど、彼女とやり取りをすればするほど、手のひらで転がされているだけだと感じてしまうのは、果たして俺がそんな器だからなんだろうか？

まあ、今日も今日とて、生徒会室は平穏な空気に満ち満ちている。主食である八つ橋を「あーん」とか言いながら、バリバリと頬張っている彼女。

で、それを横目に頬に左手を添え、机に片肘をつく俺。

ここまでは一万歩譲って、まぁ、何処にでもある生徒会室の風景だ。

ただ、今日は、お客さんがいる。

愛用しているスケジュール帳に自分で書いた「３３」という謎の数字を、何の数字か思い出させてほしい、という何とも間抜けでムチャ振り感が満載の依頼をしてきた先生がいる。

俺たち二人の向かい側に、ハンカチで汗をポンポンと拭いつつ「わかるかね？」とでも目で訴えかけている数学担当の吉井先生である。

纏わりつくような静寂が部屋中を包む込む中で、俺はひとつ小さく咳を払うと丁寧に始める。

「……吉井先生、これはですね……」

「わかりませんな！」

そうです、わか……

「諦めんの、早っ！ふんぞり返って何言ってんだよ！お前が強引に引き受けたんだろうがっ！見ろ、先生ガッカリしてんじゃねぇか」

彼女がぱっと先生を見ると、先生は小声で「そうか、そうだよな……ごめんな……」とか呟いている。

先生の頭の上には暗雲が立ち込めている。

「い、いやいや、先生。考えます、考えますから。ね、ね。てか、

お前も協力しろよ！言い出しっぺだろーがっ！」
俺が怒鳴ると、横で口を鉛筆の先のように尖らせて、わざとらしく「う～ん」とか考えたふりをしている。
しかし、この数字だけではなんともらなん、というのが俺も本音。
この「３３」が先生に携わる何らかの数字である事を、先に紐解いていかなければならないだろう。
「先生、３３に関係する人物とか、出来事とか何か思い浮かびませんか？何でもいいんです」
「あ、ほら。結構この数字だけ他の字よりも、走り書きっぽく書いてあるから、よっぽど急ぎの用だったんだね」
うーん。確かに、他にメモを取っている字と比べると、急いで書いたような感じがする。
例えば、大事な仕事をしている最中に突然の電話を受けて、電話の内容の全てではなく、用件を端折（はしょ）って重要な数字だけを残した。
あるいは、この３３という用事自体をこれからしよう、というまさにその時に、外せない別の要件ができたために、忘れないよう急遽（きゅうきょ）書いたものか……。
といっても、先生自身が全く思い出せない事態となっている今では、３３に引っかかりそうなヒントをこちらから与えていくしか手段はない。
「先生が担当しているクラスで、出席番号が３３番の生徒はどうですか？」
「いや、そりゃ考えたけど、出席番号を書くくらいならちゃんと名前を書くよ、神崎くん」
確かに出席番号よりも、名前を書いておく方が自然だ。いくらその時に急いでいたからといって、自分でそんな回りくどい書き方はしないよな。
「そんじゃあ、３年３組に何か用事があるとか？」
八つ橋がなんかテキトーにアイデアを出してくる。
「それはないな。お前だったら、３年３組だったら普通はどう書く

？」
「えー……それはぁ『３－３』……かな？」
そう。３年３組は普通なら、３－３という具合に数字の間に「ダッシュ（－）」を入れる。続けて３３と書くのは不自然だ。
「それは、その、急いでたから――――――」
「間の棒線一本書くぐらい、一秒もかかんねーよ」
俺にそう言われると、何だよ折角思いついたのにさっ！ってな感じで、ぷいっとそっぽを向く。おこちゃまだから、そんなもんだろう。
しばらく静かになりそうなので、放っておこう。
「……そう言えば、吉井先生。先生って、野球部の顧問でしたよね？今日練習に参加しなくていいんですか？」
「あぁ……もう、こっちの方が気が気でなくて……まあ、後で顔を出すよ。あいつらは、あいつらでちゃんとメニューをこなしてると思うから」
えぇー……そんなんでいいの、先生。自分で書いてやつが訳わかんないメモで、それが今日なのは気にはなるけど……部員、可哀そうじゃん……。
「……待てよ。背番号が『３３』ということもあるか……」
「まあ、考えられなくは無いんじゃないんですか？で、その選手になんか用事あったんですか？」
「そうだな～……何かあったような気がするなぁ～……」
俺が本当に思いつきで、しかも心配して言ったことに対して先生が、うす～く食いついて来た。
彼女も八つ橋を食べ終え、暇そうにしているので、とりあえずその背番号３３番くんに会いに行くことにした。

グラウンドに着くと、様々な部活が所狭しと自分たちのテリトリー内で懸命に練習に励んでいる。
それは校内とではうって変わり、やる気と熱気とが混じり合い、

それはそれは活気に満ち溢れている。

――――――ほらほらーっ！もっといけるぞー！もういっちょー！！

――――――気合い入れろ、気合い！そんなんじゃあ、スタメンに入れんぞぉ！！

――――――３３……３３……何だったけな……

まあ、それはそれは場違いで、お経を唱えてるような声も中には聞こえるが、それはこっちの話だ。

その中で野球部はグラウンドの東側の隅、バックネットが張ってある場所でコーチと部員とがちょうどノックの練習をしている。

コーチは取れるか取れないかの、絶妙なところにボールを転がすと、部員たちに檄を飛ばしている。

例の「３３番くん」も泥だらけになって、その練習に参加している。ユニフォームには胸に「武元（たけもと）」と書いてある。

そこへ、吉井先生がコーチに「タイム」と言って、少し休憩をさせるように促すと、部員たちは揃って、はきはきと「ありがとうございますっ！！」と、ベンチへ下がる。

八つ橋女も見習ってほしいものである。

「すまん。武元、ちょっといいか」

「はい、何でしょうか」

肌はこんがりと焼けていて、すらっとしている。身長もそこそこあるようだ。俺より少し高いので１７７，８ｃｍといったところか。

汗だくの顔をタオルで拭いながら、こちらへ駆け寄って来てくれる。

「武元、その、なんだ。……今日、何か先生に用事があったか？」

なんだろう。

周りの空気がどんよりと滞り、一切の音が遮断されているかのような、この重い感じは。

「え？……別に、無いですが、何かあったんですか？」
「そうか……それなら、いいんだ」
ないんかい。そりゃそうか。
俺たちが変な空気になっているんで、早く退席したいと思っていると、彼が急に先生に詰め寄る。
「あの、今日の用事ではないですけど、先生。僕はいつまで３３を着ていればいいんですか？スタメンでもないのに、背番号着てるのって、おかしいですよ！」
……どういう事だ？彼は番号をもらっているという事ではない？全然意味がわからん。
「いや、その、ユニフォームを発注してはいるんだが、まだ届いてないんだよ。すまん、もうちょっとだけ、な、頼む！」
「そうやってもう随分経ちますよ、もう。先輩や同僚からも『スタメンじゃないのに番号貰えていいなぁ、お前は』とか言われてるんですから、頼みますよ、監督っ！！僕、もう耐えられないですっ！」
「まあ、まあ、そう言わずにだな……」

先生の面目丸つぶれの真相はこうだ。
武元くんのユニフォームだけ先生のミスで「エル」を「エス」と書いて発注したという。
とんでもなく小さいサイズが届いた武元君は、当然着る事ができず、先生が用意した「先輩の遺品」つまり「御下がり」を着ているという訳だ。
それには「３３」が付いている。仕方ないから、発注したユニフォームが届くまでの間、彼はそれを渋々着ているという。
野球部員にとって背番号が付くという事は、相当誇らしい事だと思うのだが、彼の場合完全に晒し者になっているようで、あまりにも不憫（ふびん）でならない。
……吉井先生と武元くんはまだ、揉めているが、俺と彼女は先に生徒会室に戻ることにする。

「カタカナじゃなくて『L』って、アルファベットで書きゃよかったのにさっ。なんだか残念なせんせーだね」

彼女に突っ込まれちゃ、終わりだな。

人生には少しの夢とハリセンを（後書き）

次回で完結予定です。３３の謎は解決するんでしょうか？
うやむやのうちに幕を閉じるんでしょうか？

ピラミッドは空から見ると正方形

一巻の終わり、とはいろいろな意味でこういう事ではないだろうか。

謎は尚も深まるばかり……と言えば格好はいいが、全く事が運んでいないだけなんだよな……。

手掛かりは「３３」と書かれたメモの数字だけ。

本当にこれだけ。

今日の事なのに、書いた本人さえ「うーん」と頭を抱えるばかり。

それでも解決したい俺の横では、のんきに相変わらず八つ橋を貪る女。

……どれだけ好きなんだよ。

「そ～だな～……これでご飯は3杯はいけるかなぁ」

「うわっ！なんだよっ、人の心の中を読むんじゃねぇー！」

ん？という顔をして、彼女が首だけを動かして俺を不思議そうに見る。八つ橋は相変わらず銜えたままだ。

ついに読心術までもできるようになったか、こやつは……

「神崎クン、なんか独り言呟いてたよ。なんか、ノイローゼ？大変だね～」

「はっ倒そうか、しまいにはよっ！誰かさんのせいでそうなのかもな！」

と、突然目の前で吉井先生が青い顔をして、蹲（うずくま）った。

「そうか……そうだよな。俺のせいだ、俺の……はは、は……」

うわ、病んでる。

いやいやいや、先生のせいでもあるんだけど、一番の原因は「八つ橋のこいつ」でせいであって、そんなに落ち込まなくても……と言ってもまた先生は落ち込んでしまうかもしれないし……

あああぁぁぁ、もうどうにかならんのか、この状況は！！

「とにかくっ、先生も八つ橋ばっか食ってるお前も、この『３３』を何とかしないと、今日が終わってしまう」
そう、タイムリミットは本日。
その「３３」が書かれている日付が、今日だからだ。先生が焦るのも正直わかる。わかるだけに、何とかしてあげたい。
例え、この女が「何でも生徒会にお任せをっ！」と半ば自分勝手なことを全館放送を通して発信して、それに俺が巻き込まれるような形で頼まれている、としてもだ。
しかもしかも、いざ依頼が来たと思ったら、この俺にほとんど丸投げでやんの！！
「わかんなぁ～い。つまんなぁ～い。もう飽きた」
馬鹿野郎っ！なんだそれは！なんだその眼鏡は！？
「神崎クン……何だか、だんだん鬼のような形相になってきてるんだが……大丈夫かい？」
「ホント大丈夫？八つ橋欲しかったら、そうと言えばいいのに……」
二人とも……ちょっと今、俺に構わないでそっとしておいてくれい。

「あのさ。やっぱ、『３３』って何か隠すための暗号じゃないの？」
「何を？」
「もしも、誰かさんがそれを見ても、それってわかんようにするためじゃん」
「だから、なんでわざわざ急いでるときに、そんな事する余裕あると思うのか？」
いや、待てよ……
先生が「３３」と書いた事さえ覚えてないというのに、ましてやその時の状況を覚えているということ自体、矛盾（むじゅん）しているのか。
「先生、このメモを書いた時、本当に慌てて書いたものなんですか？」
「ああ。電話をしていて、呼ばれたので、書いたということは覚え

てるんだんが……本当にその時『慌てて書いた』のかどうかと改めて聞かれると、自身が無くなってきたな……」
なるほど。この吉井先生は、的確な証拠や形が無いと自身が無くなるし、記憶もあやふやになるみたいだ。
さすが、この辺は理詰めで考えそうな、「数学の先生」といったところか。
「じゃあ、仮に何かの暗号だとすると、何だと思うんだ？」
俺は腕組みをして、脚を組み、彼女に何か考えでもあるのかというように、振ってみた。大体、言い出しっぺは彼女だ。
彼女は一回「ふあーあぁぁ……っと」と、大きな欠伸をかました後、目をつぶって「むー……」と考えるふりをしている。
胡坐（あぐら）を掻いて右に左に2，3回メトロノームのように、カッチカッチと大きく揺れた後、急に目を開いて「はっ！」とか言ってる。
一休さんか。
「……『3＋3』は？」
「6だな」
「……じゃぁ『3×3』は？」
「9だろ」
ここまで言うと、彼女は「どうだい」みたいな、どや顔を俺たちに見せてくる。
「だから何なんだよ」
「69」

――――――しーん――――――

は？……だから？なんだこの、突っ込みきれない、どうしようもなさは。
しかも、変に突っ込むと、からかわれるパターンのやつだ、これは。たちが悪い。もう、いいや。こいつに期待したのが悪かった。
俺が悪かった。

「『99．9999%』のことですよ」
「何が？」
「さぁ……」
「おまえがいうんじゃねぇよ！！この八つ橋女が！！」
「たっぁ、いたーいっ！」
これは、本格的に埒が開かん。
やはり「暗号」などではなく、ただの「数字」としてそのまま書いたと思うのが普通だろ。
なんでわざわざ自分も思い出せない様な暗号なんて作らにゃならん。
「結局、やっぱり33に関係する何かなんじゃないんですか、先生？」
「先生の歳とか？」
「私の歳は30だ。だた、その……歳というか、何か引っかかるんだよ……」
歳か……年齢……。
「誰かの33歳の誕生日かなんかじゃない？」
誰かの誕生日、か。
なかなかいい事をいうじゃないか、短髪メガネっ娘！
初めて感心したぞ。ご褒美に、後で八つ橋をあげよう。
「誰か33歳になる人とか、いないんですか！？今日ですよ、今日っ！！」
「うーん、でも、今日誕生日の人なら、私もさすがに覚えてると思うんだけど……まいったなぁ～、どうしよう……」

――――――キーン　コーン　カーン　コーン――――――

うわ。ここに来て下校時刻かよ……。ついてねーな。
見ると生徒会室の部屋もすっかり夕焼け色に染まり、窓から臨む景色からも、ぽつぽつと街の明りが灯る。

一気に寂しい感じになってきたなぁ。
「先生、俺たちもそろそろ帰んないと、下校時刻だしさ。まあ、なんだ、元気出しなよ先生。大事用事ならきっと、相手から連絡とかあるかもよ」
「そーだよ、せんせ。いちいち落ち込んでたら、ハゲるよ！」
いいから、お前はだまってろっ！

まだ、時間はあるか。諦めるな、俺。
何かないのか……。
待てよ、先生は「誕生日」に少し反応していた。
やっぱり誰か「３３歳」になる人なんじゃないのか？
わざわざスケジュールに入れているぐらいだ。きっと誰かの誕生日のパーティーに呼ばれているとか、プレゼントの準備をしておこうと思っていたに違いない。

「先生！！」
「な、何だ、神崎クン。」
「全力で『３３歳』に今日なる人を思い出してください！きっと、いると思うんです！スケジュールにわざわざ書くことですよ！！」
ひーっ！と、いう漫画みたいな顔をして、先生は汗ダラダラかいて、それをハンカチで拭きに拭いて、「えーとなー……なんか、引っかかるんだよなー」と言いながら唸っている。
頑張れ先生。頑張ろう、先生！
その気になれば、人は何だってできる！
神様は人に乗り越えられる試練しか与えないんだ！！
「誰かいたっけな～……」

生徒会室に張り詰めた空気が流れる。
結構時間がたったような感じもするし、短い時間だったような気もする。

その時、

――――――ピロリロリーン　ピロピロピロリ～ン――――――

「あ、すまん、私の携帯が鳴ってるようだ」

突然先生の携帯の着信音が部屋に響いて、みんなびっくりした。

ふぅ～……

なんか一気に緊張感が解けたなー。

「もしもし……あぁ、そろそろ帰るよ……」

あぁ……腹へったな～……

今日の晩メシ何だろうなぁ～。「鶏の唐揚げ」だったらうれしいなぁ。

「あたしも唐揚げ食べたい」

「って、だから勝手に人の心を読むな！」

「だって、また独り言いってたんだもーん」

部屋も部屋の外も、だんだん静けさが増してくる。

俺たちがしゃべるのを止めると、先生の電話の会話の内容が少し聞こえるようになる。

「それじゃあ、今から帰るよ。うん……え、ああ、ヒロシに代わるのか？わかった……」

ヒロシ。

息子さんか？

「……モシモシ、パパ？ヒロだよ。元気？」

「ああ、パパは元気だよぉ～。ヒロシもいい子にしてたか～、パパもうすぐ帰るからなぁ～」

「そうだ、パパ。きょうからワンちゃんくるでしょ？もう、名前きめた？パパがきめるっていってたもんね！？」

……ワンちゃん……名前……。

……心の中の、螺旋階段の一番奥。頑丈な南京錠で施錠されている堅牢な扉。

鎖で雁字搦(がんじがら)めになっていたそれは、それらのキーワードが正に鍵となって、重く静かに開かれようとしている。

……というか、開いたのはいいが、大きな声で「開いた！」とは言えない！

決して言えない！

ピッ。

先生は一通り話し終わると、携帯をそそくさとポケットにしまう。

「それじゃあ、先生は帰るわ。今日は、詰まんない事に付き合わせて悪かったなぁ」

「はぁ……」

「いいの、せんせ？遅いから帰って来いって？なんだかんだで、尻に敷かれて……ぐはっ！」

俺の鉄拳が飛ぶ。

「『３３』は、もう、いいんですか？……なんか、中途半端で力になれなくて、ホントすいませんでした……」

その瞬間、先生の体がわずかにピクンと震えた。

「いや、なんだ、こういう時もあるよ。刑事ドラマじゃあないんだ。迷宮入りの事件……それもそれで謎めいてていいじゃあないか～」

……なんか変だな。

今まですんごい落ち込んでて「だめだー」とか頭抱えてた先生が、どうしたんだ。

「先生、電話で何か言われたんですか？大丈夫です？」

「大丈夫だよ～。じゃあ、先生はこれで」

すちゃ！と右手を挙げると、生徒会室の扉を開けてすたすたと出

て行ってしまった。
七尾と俺と、顔をお互い見合わせたが、まあいいかと、もう帰ることにした。
っていうか、もういい加減に下校時刻過ぎて遅いし。あんまり下校が遅いと、守衛さんに怒られてしまう。
「まあ、なんだ。七尾俺たちも帰るか」
「そだね。あ、帰りに神崎クンちの近くの八つ橋買ってくから、場所教えてよ」
「ったく、まだ、食うのかよ……今日だけで3袋目だぞ……」
「甘いものは、別バラなんだじょー」

「パパー、おかえりなさーい！」
「ああ、ただいま」
「このこが、ワンちゃんだよ～。かわいいでしょうぉ～」
「はっはっは……こいつは、かわいいかなぁ～。よしよし、いい子だいい子だ……」
「ねぇねぇ、パパ。このこの名前きめた？なんてよべばいいの？」
「パパはね、『ロロ』って決めてたんだけど、駄目か？」
「『ろろ』かぁ……へんな名前ぇ～」
「そうか？逞しいワンコになってほしいから、そう考えたんだけどなぁ～……」
「パパ、このワンちゃん、おんなのこだよ～」
「そうかそうか。はははは……」

……言えない。

絶対に言えない！！
自分で書いた字が読めなくて、あれだけ「33」って何だろうって、考えてくれてたのにっ！！
前もって飼うことになる犬の名前を書いていたなんて……

なんで平仮名(ひらがな)で書いてしまったんだろう……。
カタカナで書いておけばあんな相談はしていなかったよな～……。
ん？
……なんか、似たようなことで誰かにも迷惑をかけたような気がするが……
ま、いいか。
そのうち思いだすだろう。なんて。
「パパにももう一回、抱かせてくれよう～」
「もう、パパばっかり、ずるーい！」

ピラミッドは空から見ると正方形（後書き）

いかがだったでしょうか？

「３３」の正体、ここまで引っ張っておいて、なんだよ！と思われるかもしれませんが、これが「かんなな」クオリティです＾＾

いったん、このお話は終結ですが、気が向けば次回作も考えます。
その時は、もう少し長めのお話を、と思っております。

ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7609w/

かんなな

2011年10月1日03時13分発行